

## 疎外感について

中山 ちなみ\*

### On the Feelings of Alienation

Chinami NAKAYAMA

The problem of alienation is an extreme sociological problem. However, the concept of alienation has been used ambiguously and the definition of the concept is not clear. Melvin Seeman, in his 1959 pioneer study on alienation "On the Meaning of Alienation", narrowed the concept of alienation that had been used in a variety of meanings into the following five concepts: "Powerlessness", "Meaninglessness", "Normlessness", "Isolation", and "Self-estrangement".

This article is a study on the feelings of alienation as a social psychological concept. First, I reexamine the alienation concept based on Seeman, and reclassified the feelings of alienation with three elements: "Powerlessness" "Isolation", and "Secession sense from social value". Next, I suggest that one's feelings of alienation has two levels, that are "superficial" and "depth", and I argue it is necessary to understand the feelings of alienation considering these two levels. By putting the strength and weakness of these two feelings of alienation together, four types of feelings of alienation are constituted: (1) complete alienation, (2) superficial alienation, (3) depth alienation, (4) non-alienation.

For the purpose of using these new frameworks on the feelings of alienation in empirical studies, I constituted two scales to measure superficial and depth feelings of alienation. Using these scales, I grouped the four types of feelings of alienation and analyzed the consciousness about political apathy and the degree of interest in social problems by comparing these four types. As a result, the depth alienation type shows the lowest interest in variables of political action or political awareness. On the other hand, the superficial alienation type who has been considered as the stratification of political apathy by the traditional studies, gets the highest score of political consciousness.

---

キーワード：疎外感、疎外感尺度、政治的無関心

Key words : feelings of alienation, feeling of alienation scale, political apathy

※ 本学文学部現代社会学科

## 1 はじめに

疎外の問題は、現代に生きるすべての人びとにとって最も根本的な問題である。それは人間の自由や幸福という問題と大きくかかわっているからである。そして、ニスベットが「今日あらゆる社会科学のなかで、疎外のさまざまな同義語が人間関係の研究に不可欠の位置を占めている」と述べたように、社会学においても疎外は常に中心的なテーマをなしてきた [Nisbet, 1953:15]。疎外は「われわれの時代のムード」として人びとを強く引きつけるものであった [Pappenheim, 1959=1960:11]。しかし、そのような疎外への関心も時代とともに消え去り、現代では疎外という言葉自体が死語となってしまった感さえある。人びとの関心はまったく別のものに向けられるようになり、人びとの表情もかつての悲壮な雰囲気とは無縁である。もはや現代では疎外は存在しなくなったのかもしれない。

ではなぜ今、疎外の問題をとりあげる必要があるのか。たしかに人びとは疎外などまったく感じていないようにみえる。そして、疎外を感じてもいない人を疎外されていると決めつけることは、その人をかえって不幸にするのではないかという考え方もあるだろう。しかし、本当に疎外は存在しないといえるだろうか。むしろ人びとが疎外を感じていないことのほうが問題なのではないだろうか。ミルズは現代社会において「陽気なロボット」が支配的になることを危惧した [Mills, 1959=1965:224]。それはその「陽気さ」が、人間の理性や自由を放棄することの代償として得られるものであるからであろう。同様に、人びとが疎外を感じないために疎外の問題を回避しようとするならば、人びとは「陽気なロボット」として生きなければならない。すなわちそれは自由を放棄することにほかならない。そしてそのような社会においては、疎外は決して克服されたとはいえないのである。

本稿の目的は、現代に生きる人びとの疎外の意識を全体的にとらえることである。これまでの疎外の経験的研究は、人びとが「疎外」として感じている疎外感のみをあつかってきた。しかし、上に述べたような「陽気さ」にひそむ疎外も含めた議論をすることによって、はじめて疎外感の全体がとらえられたことになるのである。そして、それは具体的には次の3つの課題があることを意味する。(1) 従来の多義的な疎外概念を整理し、深層の疎外感という視点を導入して、疎外感を類型化すること。(2) 経験的研究に使用可能な疎外感の尺度を構成すること。(3) 疎外感の類型と人びとのさまざまな社会意識との関連について分析することである。

ところで、疎外の問題を疎外感からとらえる方法、すなわち疎外の社会心理学的アプローチに対しては、社会構造上の客観的事実を主体の意識・心理に還元してしまうのではないかという批判がなされるかもしれない。たしかに疎外感とは、社会構造上の疎外とは異なる。すなわち、疎外と疎外感とは異なるのである。しかし、疎外の問題を総体としてとらえるためには、一方だけをとりあげるのは不適當で、両者をともにとりあげる必要がある。本稿が社会構造上の疎外の問題にはあえてふれず、疎外感のみを問題にするのは、そのアプローチのみが重要であるということを示すためではなく、このアプローチもまた重要であるという認識にもとづいている。残された重要問題である、社会構造上の疎外事態の出現のメカニズム、疎外と疎外感の関係、疎外ならびに疎外感の克服のありようにかんしては、本稿につづく研究の中で明らかにされなければならない。

## 2 疎外概念

### 2.1 疎外概念の研究

疎外の問題についてはさまざまな研究がなされてきたが、疎外の意味それ自体についての一般的な合意があるわけではない<sup>1)</sup>。しかし疎外の経験的研究のためには、疎外概念を明確にしておく必要がある。ここでは社会心理学的な立場から疎外を論じたシーマン、ディーンの研究をとりあげ、検討を加えることにしたい。

#### (1) シーマンの疎外概念

疎外を社会心理学的な観点からとらえようとした社会学者は多い。なかでも先駆的な研究として知られているのが、シーマンの疎外概念の研究である。彼は経験的な立場から、疎外を社会的条件－疎外感－行動上の諸帰結（社会構造－意識－行動）という連関でとらえることによって、疎外感を現実の社会の文脈とかかわらせながら理解しようとした。1959年の論文「疎外の意味について」の中で、彼は疎外を5つの意味に分類し、それぞれの用法が伝統的な社会学的思考のどこにどのようなかたちで見いだされるかを検討して、それまでの多義的・哲学的な概念を経験的言明によって明確にした。彼の疎外概念の第1の意味は「無力性」である。これは「個人の行動が、その個人の求めている帰結、あるいは強化肢を決定することができないということについてのその個人の主観的な予測、あるいは蓋然性」と定義されている。第2の意味は「無意味性」である。これは「行動の未来の帰結について、十分な予測がなされ得るということについての低い主観的期待」と定義される。第3の「無規範性」は「所与の目的を達成するために、社会的に是認されない行動が必要であるということについての高い主観的期待」を意味する。第4の「孤立性」は「所与の社会において、典型的に高く価値づけられている目標や信念に対して、低い報酬価値を付与する」ことである。この孤立性の概念については、後にシーマンは「文化的疎隔」と「社会的孤立」とに分割し、「文化的疎隔」をもとの「孤立性」の意味でとらえた。そして「社会的孤立」は「個人の社会的接触の強さの欠如、すなわち社会的適応の欠如」と定義された〔斎藤他, 1982:116-117〕。最後の「自己疎隔」は「所与の行動の予測される未来の報酬、すなわち活動自体の外部にある報酬への依存の程度」によって考えることができると述べられている。

#### (2) ディーンの疎外概念

シーマンと同様に、経験的な立場から疎外概念を整理した社会学者にディーンがいる。彼は独自に、疎外概念を「無力性」「無規範性」「社会的孤立」という3つの主成分に分類した。第1の要素である無力性については、彼は明確な定義をおこなっていない。しかし、行為の帰結を理解し影響を及ぼすことができないという感情は、シーマンの無力性・無意味性の概念をともに含んでいるといえる〔Dean, 1961:754〕。第2の要素である無規範性は、デュルケムのアノミーの主観的意味としての「非常な不安や心配、手段の標準からの分離の感情、無意味な感情あるいは確固たる目標が存在しないという感情」を指す。これはさらに2つの下位類型に分類される。ひとつは「目標喪失」であり「目標や人生の方向性を与える価値の不在、本来的で社会化された価値の喪失、絶望的で混乱した不確実性」と定義され、もうひとつの「規範の対立」は「対立した規範を組み入れている個人の困難」にかかわる意識である。第3の社会的孤立もデュルケムのアノミー概念にさかのぼり、「集団からの分離の感情、あるいは集団の標準からの孤立の感情」と定義される。この社会的

孤立の概念はシーマンに影響を与え、彼の孤立性を文化的疎隔と社会的孤立に分割させることになった。

### (3) 両者の問題点

シーマンの研究は、疎外の概念研究の先駆的役割を果たしたという点においては評価される。しかし彼の5つ(6つ)の用法は、概念的に類似したものと疎遠なものが混在しており、まだまだ整理不足であるといえる。ディーンは概念を3つに整理したことでシーマンよりも一歩進んでいるが、定義が曖昧であり、特に無規範性において下位類型の有効な位置づけがなされているとはいえない。また、シーマンの概念を十分に活用していないことも問題点としてあげられる。以下ではこれらの問題を考慮しつつ、独自の立場から疎外概念の整理を試みたい。

## 2.2 新しい疎外概念の定義 (一) 表層の疎外感

シーマンは疎外の伝統的な用法の中に6つの意味を見いだした。またディーンは3つの疎外の成分についての考察をおこなった。このことは、疎外が症候群とみなされていることを意味する。本稿でも疎外を症候群としてとらえる立場をとり、「無力感」「孤立感」「社会的価値からの離脱感」という3つの独立した要素に分類する。

### (1) 無力感

第1の要素である無力感は、自己の行為の統制・予測にかんする個人の疎外の意識である。これはシーマンの無力性・無意味性に対応する概念である。無力感に無意味性が含まれることについては、すでにディーンによって示唆されている [Dean, 1961:754]。シーマンの無力性が行為の帰結の統制能力の欠如を意味しているのに対して、無意味性は行為の帰結の予測能力の欠如を意味している。つまり、無力性が「自己の行為に対する無力感」であるならば、無意味性は「自己の認知に対する無力感」であるといえる。したがって無力感は「行為の帰結の統制能力の欠如の意識」「行為の帰結の予測能力の欠如の意識」と定義され、またここから派生的に「行動に対する消極性」「自信喪失・弱小感」という特徴も考えられる。

### (2) 孤立感

孤立感は集団所属にかんする個人の疎外の意識である。これはシーマン、ディーンの社会的孤立に対応する概念であるが、集団の提示する価値への適応という意味は含まれていないことをここでことわっておく必要があるだろう。この孤立感は「所属集団から孤立しているという意識、あるいは所属集団がそもそも存在しないという意識」と定義される。

### (3) 社会的価値からの離脱感

第3の要素は社会的な価値から離反しているという意識であり、これを社会的価値からの離脱感とよぶことにする(以下「価値離脱感」と略記する)。シーマンの無規範性・文化的疎隔・自己疎隔はここに分類される。彼のいう無規範性は社会的に是認されない行動をとるという意味において、文化的疎隔は社会的に高く価値づけられている目標や信念に対して評価しないという意味において、社会が提示している価値から離脱しているといえる。また彼のいう自己疎隔は「その行為に個人的には何の価値も付与していないにもかかわらずその行為をし続けること」であるが、これも行為自体あるいはその直接的な帰結に

対して価値を見いだせないという意味において、社会的価値からの離反感が生じている状態を指すものである。さらにこれらのシーマンの概念とは別に、すべてにおいてその価値を認めないような人びとの類型——無意味性——も価値離脱感に含めることができるだろう。この無意味性がシーマンの無意味性とは異なる概念であることには注意が必要である。シーマンは無意味性を行為の帰結の予測不可能性の意識としてとらえた（筆者はこれを無力感に入れた）。しかし無意味性のより重要な意味は、すべてが無価値に思われるという言葉の本来の意味であろう。そして価値離脱感に関連しているのは、この本来の意味における無意味性である。

#### (4) マートンの逸脱図式による整理

価値離脱感は、マートンの「文化的目標」「制度的手段」の概念を用いると、よりわかりやすく整理することができる[Merton, 1949=1961:121-145]。すなわち目標と手段を「社会が提示する価値」とみなし、いずれか一方、あるいは両方に対してその価値を認めることができない場合に、社会的価値からの離反感が生じると考えるのである。したがってマートンの用語では「革新」「儀礼主義」「逃避主義」「反抗」が価値離脱感にあてはまる。そしてこれらは表1に示したとおり、シーマンの無規範性・自己疎隔・本来の意味における無意味性・シーマンの文化的疎隔にそれぞれ対応している。

表1 マートンの逸脱図式とシーマンの類型との対応

文化的目標	制度的手段	適応様式	シーマンの類型
+	+	同調	—
+	—	革新	無規範性
—	+	儀礼主義	自己疎隔
—	—	逃避主義	無意味性
±	±	反抗	文化的疎隔

註) ここでいう無意味性はシーマンの無意味性とは異なる。

表1にかんして注意すべきことが3点あげられる。第1の点は、ここでは価値離脱感が社会的価値の存在を前提としており、社会的価値が存在しない場合や不明瞭である場合は考慮していないことである。第2の点は、表中の+-±は意識レベルの個人の評価であること、つまり行為レベルと混同してはならないということである。第3の点は、+-のとらえ方についてである。価値離脱感には「自己の価値とは無関係の、社会的価値への単なる承認・非承認」「自己の価値と社会的価値との一致・不一致」という2つの意味が含まれていると考えられる。したがって「承認・非承認」「一致・不一致」の両側面から+-をとらえる必要があり、価値離脱感の特徴としては「文化的目標の非承認」「制度的手段の非承認」「文化的目標と自己の価値との不一致」「制度的手段と自己の価値との不一致」の4つについて考慮しなければならないのである。

ところで、自己疎隔の位置づけにかんしては一言ことわっておく必要があるだろう。シーマンの自己疎隔はリースマンの「他人志向」、さらにマルクスの疎外論に通じる概念である[Seeman, 1959:790]。そしてシーマンのいう自己疎隔された人とは、行為に内在的な価値を見いだせず、外在的な目標に向かって行為するような人を指している。すなわち自己疎隔された人は、行為およびその直接の帰結には関心がなく、外在的で遠い目標のみを重

視して行為しているのである。例えば、流れ作業をしている労働者は、労働それ自体には喜びや満足を見いだしていないにもかかわらず、賃金を得るという外在的な目標のために労働を続けている。彼はたしかに「お金をかせぐ」という文化的目標からは逸脱していないし、制度的手段としての労働に従事している。しかし現在の行為とその直接的帰結にのみ焦点をあてて考えるならば、彼の行為は「行為の目標に価値を認めないにもかかわらずその行為をすることは拒否しない」という行為様式にあてはまる。ゆえに自己疎隔はマーソンの儀礼主義と対応しているのである。

## 2.3 新しい疎外概念の定義（二） 深層の疎外感

### (1) 深層の疎外感という視点の必要性

以上において、既存研究をもとに疎外概念が3つの要素に整理された。しかしこれで概念の整理は十分であるとはいえない。というのは、シーマンやディーンも含めて、これまでの疎外の実証研究は人びとに認知された疎外感のみをあつかってきたからである。そして前項の定義も、この「認知された疎外感」についてなされたものであった。しかしながら、認知された疎外感で疎外感のすべてが説明できるものなのだろうか。例えば、先に述べたようなミルズの「陽気なロボット」の陽気さにひそむ疎外感、認知された疎外感からはとらえることができないのではないだろうか。そこで、陽気なロボットのように疎外を意識していない人びとをも含めた議論を可能にするような、新しい疎外感の枠組みを構成する必要性が生じてくるのである。この新しい枠組みによって疎外感を全体的にとらえることができるはずである。そのためには、認知されない疎外感をとらえる視点が必要である。

では、認知されない疎外感というものがなぜ存在するのだろうか。この疑問に対しては、フェスティンガーの認知的不協和の理論がひとつの説明をしている [Festinger, 1957=1965:1-32]。彼の不協和を低減・回避する圧力についての議論は、疎外感にも適用することが可能であると思われる。疎外感を「人びとにとって好ましくない感情」であると仮定するならば、この感情をいつまでも意識内にとどめておくことは不快であり、不快に対しては防衛機制がはたらくと考えられるからである。そしてその結果、疎外感は回避され、意識されなくなるのである。この疎外感に対する予防措置のことを「疎外感回避志向性」とよぶことにしよう。

疎外感を回避すれば疎外感は感じなくなるかもしれない。しかしフェスティンガーが「不協和の累積」とよんでいるように [Festinger, 1957=1965:33-35]、回避後に疎外感は消滅してしまうわけではない。では回避された疎外感はどこに存在するのだろうか。それは抑圧されて意識の深層部に追いやられてしまっていると考えられる。したがってこの回避された疎外感、**「深層の疎外感」**ということができよう。それに対して認知された疎外感の方は、**「表層の疎外感」**とよぶことができる。このように疎外感を表層と深層の2水準からとらえることによって、陽気なロボットのような人びとを説明することも可能になるとと思われる。もちろん、深層の疎外感、直接質問によって聞くことはできない。しかし疎外感回避志向性が強い人は表層の疎外感を回避していると考えられるため、疎外感回避志向性によって深層の疎外感を測定することは可能であろう。そこで以下では測定の前段階の作業として、無力感・孤立感・価値離脱感のそれぞれについて、深層の疎外感の特

徴を述べていくことにする。

### (2) 無力感

無力感は行為の帰結の統制能力・予測能力の欠如の意識であるから、「困難な課題の回避」「予測の拒否」によってこれを回避することができる。また、自分が無力なのではなくて周りの環境が悪いのだと思うことも無力感を回避することにつながるので、「外的要因への帰属」も疎外感回避志向性の特徴として考えられるだろう。

### (3) 孤立感

孤立感は主体と集団との物理的・心理的位置関係についての意識であるので、集団に物理的に所属し、心理的に同一化することによって孤立感を回避することができる。したがって「孤独の恐怖」「過同調」が深層の孤立感の特徴となる。

### (4) 社会的価値からの離脱感

社会的な価値からの離反を感じないためには、社会的な価値への疑いが生じてはならない。疎外感回避志向性の強い人は、社会の提示する価値に疑問を感じることへの恐怖も強いと考えられるので、自らの価値を変更・放棄したり、自己や社会の価値への問いかけそのものを拒否する傾向があると思われる。つまり、深層の価値離脱感は「批判的志向の欠如」という特徴をもつと考えられる。

## 2.4 疎外感の類型

前項までに明らかになったことは、疎外感には無力感・孤立感・価値離脱感の3つの要素が重要であること、そして表層の疎外感と深層の疎外感という2つの水準が考えられることである。これら2つの整理をもとに、以下の4つの疎外感の類型が構成される。類型は3つの要素のそれぞれについて、表層の疎外感と深層の疎外感の強弱によって表2のように分類することができる。

表2 疎外感の類型

疎外感	+	+	-	-
疎外感回避志向性	+	-	+	-
疎外感の類型	完全疎外型	表層疎外型	深層疎外型	非疎外型

「完全疎外型」は、表層の疎外感も深層の疎外感も強い人である。次の「表層疎外型」は、表層の疎外感が強いにもかかわらず疎外感を回避しようとはしない人である。一時代前の「連帯を求めて孤立を恐れず」という全共闘のスローガンは、この表層疎外型の一例といえるかもしれない [加藤, 1989:225-227]。「深層疎外型」は、疎外感はないがそれは疎外感回避志向性が強いためであると考えられるような人、すなわち深層に疎外感が存在している人である。一見疎外感を感じていないように見えるため、これまでの疎外研究ではあまり問題にされることはなかったと思われる。しかしこの深層疎外型こそが、本稿において最も注目されるべき類型なのである。ミルズの陽気なロボットは、いうまでもなくここに分類される。最後の「非疎外型」は、疎外感が弱くそのため疎外感回避の必要もない人である。

さて、これまでの疎外の経験的研究では、完全疎外型と表層疎外型が疎外感の強い人と

して、また深層疎外型と非疎外型が疎外感を感じていない人として、それぞれ同じ類型にあてはめられていたと思われる。しかしこのような分類のしかたはあまり有効ではない。例えば、しばしば疎外感との関連で議論される政治的無関心について考えてみよう。従来の分類では、表層の疎外感の強い完全疎外型と表層疎外型が、ともに政治に対して無関心であり、表層の疎外感の弱い深層疎外型と非疎外型が、政治に関心をもっていると考えられてきた。しかし、仮に表層疎外型が深層疎外型よりも政治への関心が高いという結果が得られたとするならば、それは従来の仮説に対する反証となる。つまり表層と深層という2つの水準から類型を設定することによって、疎外感とそれにかかわる意識についてのより厳密な議論が可能になるのである。このように深層の疎外感という視点を導入することは、今後の疎外の経験的研究に有効であると思われる。

### 3 疎外感の測定

経験的研究において疎外感の類型と諸変数との関連をみるためには、疎外感を測定する尺度を構成しなければならない。本節の目的は、疎外感の類型化のために必要な質問項目を作り、その尺度の次元性や信頼性について検討することである。

#### 3.1 疎外感の質問項目の作成

前節の疎外概念の2つの整理の結果から、疎外感は表3のように示される。そして疎外感の尺度を構成するためには、これらの6つに対応した質問項目を作成する必要がある。このことを念頭におき、表3の6つの疎外概念について、それぞれ6項目から9項目の質問文を作成した(全42項目)。作成された項目は表4、表5のとおりである。

表3 疎外感とその特徴

	無力感	孤立感	価値離脱感
疎外感	統制能力の欠如 予測能力の欠如 行動に対する消極性 自信喪失・弱小感	孤独感・孤立感	文化的目標の非承認・不一致 制度的手段の非承認・不一致
疎外感回避志向性	困難な課題の回避 予測の拒否 外的要因への帰属	孤独の恐怖 過同調	批判的思考の欠如

#### 3.2 疎外感尺度の構成

無力感・孤立感・価値離脱感は、論理的には独立した要素である。しかし経験的にはこれらは相互に関連性があると考えられるため、疎外感をひとつの尺度で測定することが可能であると思われた。そこで、表層の疎外感と深層の疎外感について、それぞれ3要素を含んだ一次元的な尺度を構成するという方向で作業を進めた。



表4 表層の疎外感の質問項目 (22項目)

無力感 (9項目)	統制能力の欠如	どちらかというと自分でたてた目標はちゃんと達成するほうだ (R) 自分のことは自分でやらないと気がすまない (R)
	予測能力の欠如	今までに経験したことは将来かならず何かの役に立つと思う (R) 何事も計画をたててから行動するほうだ (R)
	行動に対する積極性	どちらかというと積極的に行動するほうだ (R) 思いついたらすぐ実行するほうだ (R) 何でも物事ははじめるのがおっくうだ
	自信喪失・弱小感	何かに成功したとき自分の能力や努力に満足できる (R) やれば何かできるというそんな自信がある (R)
孤立感 (6項目)	孤独感・孤立感	社交的な性格である (R) 友だちはどちらかというと多いほうだ (R) よく孤独感を感じるほうだ 困ったときに助けてくれる人がいる (R) 友だちとわいわい騒ぐことが多い (R) まわりの人とうまくやっているほうだ (R)
価値離脱感 (7項目)	社会への不満	全体としてみれば、今の社会に満足している (R)
	文化的目標の軽視	お金持ちになることは望ましい (R) 学歴を身につけることは望ましい (R) 人から尊敬されるような仕事につくことは望ましい (R) 立身出世という言葉はいい感じがする (R)
	制度的手段の軽視	目標達成のためには正しくないと思うこともせざるをえない ルール違反をすることには後ろめたさを感じる (R)

註) (R)は反転項目であることを示す(以下の表においても同様)。なお、価値離脱感の特徴は「文化的目標の非承認」「制度的手段の非承認」「文化的目標と自己の価値との不一致」「制度的手段と自己の価値との不一致」であるが、本稿の目的は価値離脱感を類型化することではなく、これらすべてについて質問項目を作成することは特に重要ではない。ここでは議論が複雑になるのを避けるために、文化的目標と制度的手段のそれぞれを認めることができるかどうかということによって価値離脱感を測定することにし、その特徴を「一般的な社会への不満」「文化的目標の軽視」「制度的手段の軽視」とした。

表5 深層の疎外感の質問項目 (20項目)

無力感 (6項目)	困難な課題の回避	無理だとわかっていることは最初からやらないほうが賢明だ 社会の問題についてはそれぞれの専門家にまかせておくのが一番よい
	予測の拒否	先のことをあれこれ心配するよりも、いまを楽しく生きることのほうが大切だ 人生はなりゆきにまかせたほうが案外うまくいく
	外的要因への帰属	この世の中では能力よりも運や偶然に左右されることのほうが多い われわれ一般人が努力したところでたかが知れている
孤立感 (8項目)	孤独の恐怖	自分だけ周囲の人たちから浮いていないか気になるほうだ 自分が他人の目にどう映るかをよく意識する 人からどう思われているか気になるほうだ 非難や反感を恐れぬ (R) 疑問を感じたらそれを堂々と表明できる (R)
	過同調	あまり人目に立つようなことはしないほうがよい まわりの人が賛成することには素直にしたがったほうがよい 他人と同じように生きるのが望ましい
価値離脱感 (6項目)	批判的思考の欠如	人生はあまり深刻に考えないでできるだけ愉快におくるほうが賢明だ 今の世の中はいたずらに批判するよりも、現状を維持していくことのほうがずっと大切だ 先のことはどうなるかわからないからそのときを楽しく生きることだ 慣習や道徳にはそれなりの根拠があるのだから、人はそれに従わなくてはならない 生活に密着していない知識など何の役にも立たない 哲学者や思想家のいうことは実際の社会生活には役に立たない

表6 表層の疎外感22項目の主成分分析結果

項目の内容	主成分							共通性
	1	2	3	4	5	6	7	
どちらかというと自分でたてた目標はちゃんと達成するほうだ (R)	.36705	-.39704	-.00942	-.41067	-.00755	-.07760	-.07367	.47262
自分のことは自分でやらないと気がすまない (R)	.17193	-.42107	-.12759	-.52568	-.22689	-.04950	-.17684	.58468
今までに経験したことは将来かならず何かの役に立つと思う (R)	.47104	-.31988	.22454	-.11499	-.23973	-.20736	-.10521	.49939
何事も計画をたててから行動するほうだ (R)	.15799	-.32298	.31619	-.43848	-.21937	-.13215	-.38412	.63466
どちらかというと積極的に行動するほうだ (R)	.77227	-.02494	-.17573	-.07932	-.10421	-.04729	-.05969	.65086
思い立ったらすぐ実行するほうだ (R)	.62369	.02283	-.33493	-.20827	-.27052	-.01851	.20965	.66254
何でも物事をはじめるのがおっくうだ	.52471	-.04256	-.20880	.31113	.05025	.15820	.27526	.52085
何かに成功したとき自分の能力や努力に満足できる (R)	.44243	.10077	.16745	-.05507	-.34243	.45763	-.19057	.59998
やれば何かできるというそんな自信がある (R)	.58947	-.25065	-.06036	-.04044	-.42787	.22610	-.11839	.66379
社交的な性格である (R)	.80877	-.05926	-.24135	-.09253	-.05669	-.21085	.01247	.77226
友だちはどちらかというと多いほうだ (R)	.77540	.03485	-.05756	-.26447	-.23539	-.21475	.05209	.77996
よく孤独感を感じるほうだ	.33418	-.01117	-.05875	-.17559	.54513	.53874	.23425	.78837
困ったときに助けてくれる人がいる (R)	.55479	-.09657	.17170	-.40866	-.04718	.28531	-.06980	.60210
友だちとわいわい騒ぐことが多い (R)	.76204	.10850	-.20954	-.22485	-.04809	-.27778	-.05973	.76998
まわりの人とうまくやっているほうだ (R)	.75651	-.00470	.15240	-.12375	-.24960	-.13264	.01301	.69093
全体としてみれば、今の社会に満足している (R)	.30928	.31921	.23893	-.05495	.20543	.23250	-.50026	.60417
お金持ちになることは望ましい (R)	.14626	.62894	.01450	.22386	-.27570	.03563	.25849	.61138
学歴を身につけることは望ましい (R)	.25586	.51634	.48201	.01804	-.09105	-.15540	.05696	.60041
人から尊敬されるような仕事につくことは望ましい (R)	.28363	.44832	.44146	.14183	.05032	-.09648	.16563	.53571
立身出世という言葉はいい感じがする (R)	.29850	.51908	-.01267	-.42837	-.21835	-.15324	-.06067	.61705
目標達成のためには正しくないと思うこともせざるをえない	.06996	-.36387	.46757	-.17910	-.00121	.02160	.44297	.58468
ルール違反をすることには後ろめたさを感じる (R)	.14142	-.21235	.63387	-.03171	-.14515	-.13400	.14160	.52697
寄与率 (%)	24.6	9.3	7.5	6.5	5.3	4.7	4.6	

表7 深層の疎外感20項目の主成分分析結果

項目の内容	主成分						共通性
	1	2	3	4	5	6	
無理だとわかっていることは最初からやらないほうが賢明だ	.47517	-.07639	-.36500	-.03154	.19580	.23976	.46167
社会の問題についてはそれぞれの専門家にまかせておくのが一番よい	.56443	.34102	-.18383	.04961	-.12987	-.29224	.57340
先のことをあれこれ心配するよりも、いまを楽しく生きることのほうが大切だ	.05391	.67525	.40533	-.19428	-.12268	.04254	.67777
人生はなりゆきにまかせたほうが案外うまくいく	.46594	.24972	.08376	-.27095	.03416	.13888	.38034
この世の中では能力よりも運や偶然に左右されることのほうが多い	.24031	-.26736	.14938	-.31821	.60185	.37723	.75733
われわれ一般人が努力したところでたかが知れている	.53467	.08010	-.16035	-.35665	.05040	.14713	.46938
自分だけ周囲の人たちから浮いていないか気になるほうだ	.59710	-.32393	.41075	-.04407	.09187	-.06151	.64435
自分が他人の目にどう映るかをよく意識する	.55252	-.47088	.55896	.00268	.13504	-.0963	.86696
人からどう思われているか気になるほうだ	.59678	-.47702	.5085	.05195	.10144	-.10518	.86632
非難や反感を恐れない (R)	.50858	-.23363	.15439	.06300	-.50591	.05668	.60020
疑問を感じたらそれを堂々と表明できる (R)	.38944	-.11185	-.01778	-.18409	-.49707	.52833	.72458
あまり人目に立つようなことはしないほうがよい	.63239	-.09755	-.34086	.12051	-.11684	.16414	.58074
まわりの人が賛成することには素直にしたがったほうがよい	.56448	-.08761	-.23933	.47088	.00342	-.00255	.60533
他人と同じように生きるのが望ましい	.60831	-.00841	-.31274	-.13847	-.06388	-.03718	.49255
人生はあまり深刻に考えないでできるだけ愉快におくるほうが賢明だ	.27497	.58900	.32828	.17707	.00091	-.01437	.56186
今の世の中はいたずらに批判するよりも現状を維持していくことのほうがずっと大切だ	.59373	.16138	-.16022	-.04868	.22711	-.10976	.47023
先のことはどうなるかわからないからそのときを楽しく生きることだ	.25391	.71100	.28942	.20253	-.11081	.06765	.71020
慣習や道徳にはそれなりの根拠があるのだから、人はそれに従わなくてはならぬ	.35846	-.14368	-.30485	.60935	.28696	.00559	.69575
生活に密着していない知識など何の役に立たない	.32347	.05434	-.19529	-.45399	-.05550	-.51153	.61656
哲学者や思想家のいうことは実際の社会生活には役に立たない	.36101	.31561	-.05066	-.15226	-.05763	-.36429	.39172
寄与率 (%)	22.4	11.8	8.9	6.6	5.7	5.4	

## (1) 主成分分析

前項の42項目（表層の疎外感22項目、深層の疎外感20項目）を大学生251名（有効回答247）に「そう思う（5点）」から「そう思わない（1点）」まで5段階評定してもらい、表層の疎外感と深層の疎外感で別々に主成分分析をおこなった<sup>2)</sup>。固有値1以上で因子の抽出を打ち切ると、表層の疎外感7つ、深層の疎外感6つの主成分が見いだされた。この主成分分析の結果を示したのが表6および表7である。この分析結果から、第1主成分に最も高く負荷している項目がいちばん多かったため、第1主成分を疎外感の主成分であるとみなしてよいと思われた。そこで、第1主成分に最も高く負荷している項目を無力感・孤立感・価値離脱感の各要素から3項目ずつ選んで、表層と深層の疎外感尺度を構成することが望ましいと考えた。各3項目としたのは、経験的研究において実際に尺度を用いる際に、10項目前後が適切であろうという現実的な観点によるものである。

しかし結果からわかるように、第1主成分に最も高く負荷している項目を3項目ずつ選ぶという方法では、疎外感尺度に価値離脱感項目を3項目入れることはできない。第1主成分に最も高く負荷する項目は、表層の価値離脱感ではひとつもなく、深層の価値離脱感でも1項目しかないのである。これは価値離脱感が無力感・孤立感とは少し性質を異にするものであることを意味する<sup>3)</sup>。しかしながら、本稿の課題のひとつは疎外感の一次的な尺度を構成することであり、価値離脱感だけを尺度から除くことは望ましくないと思われた。そこで表層の価値離脱感1項目にかんしてはやや問題が残るが、表層・深層両尺度ともそれぞれ価値離脱感については1項目だけ加えることにした。したがって、両尺度は各々7項目からなり、7点から35点の範囲で示される。この疎外感尺度は、疎外感の3つの要素それぞれについて均等に反映しているというよりも、無力感・孤立感に重点をおいているというべきであろう。

## (2) 項目－総得点相関とG－P分析

次に、2つの尺度についてそれぞれ、(1) 項目と総得点との相関の検討、(2) G－P分析をおこなった<sup>4)</sup>。その結果、項目－総得点間の相関係数はいずれも1%水準で有意な相関がみとめられた。さらにG－P分析では全項目が0.1%水準で有意であった。これらの結果、ならびに先の主成分分析の結果から総合的に判断すると、両尺度の一次元性はある程度保証されたといえよう（表8・表9）。

表8 表層の疎外感についての項目－総得点相関とG－P分析結果

項目の内容	平均	標準偏差	項目-得点相関	D	G-P分析結果
どちらかというと積極的に行動するほうだ (R)	2.69	1.39	.7011**	3.2308	P<.001
思いっいたらすぐ実行するほうだ (R)	2.52	1.50	.5127**	3.2381	P<.001
やれば何かできるというそんな自信がある (R)	2.20	1.12	.4629**	2.5000	P<.001
社交的な性格である (R)	2.67	1.49	.7468**	3.2714	P<.001
友だちはどちらかというときが多いほうだ (R)	2.59	1.27	.6584**	3.2321	P<.001
友だちとわいわい騒ぐことが多い (R)	2.41	1.41	.5826**	3.2692	P<.001
全体としてみれば、今の社会に満足している (R)	2.95	1.19	.2109**	2.5567	P<.001

\* P&lt;.05 \*\* P&lt;.01

註) 項目－得点相関は各項目と当該項目を除いた他の項目による合計得点との相関係数、Dは上位群の平均から下位群の平均をひいたものである。

表9 深層の疎外感についての項目－総得点相関とG-P分析結果

項目の内容	平均	標準偏差	項目-得点相関	D	G-P分析結果
社会の問題についてはそれぞれの専門家にまかせておくのが一番よい	2.36	1.25	.1659**	3.3043	P<.001
人生はなりゆきにまかせたほうが案外うまくいく	2.22	1.01	.4617**	2.4167	P<.001
われわれ一般人が努力したところでたかが知れている	2.39	1.35	.4397**	3.1964	P<.001
自分だけ周囲の人たちから浮いていないか気になるほう	3.28	1.38	.3670**	3.2394	P<.001
あまり人目に立つようなことはしないほうがよい	2.51	1.05	.4815**	3.1042	P<.001
他人と同じように生きるのが望ましい	1.95	0.84	.5389**	2.2903	P<.001
今の世の中はいたずらに批判するよりも現状を維持していくことのほうがずっと大切だ	2.67	1.04	.4882**	1.0352	P<.001

\* P&lt;.05 \*\* P&lt;.01

註) 項目-得点相関は各項目と当該項目を除いた他の項目による合計得点との相関係数、Dは上位群の平均から下位群の平均をひいたものである。

### (3) 尺度の信頼性の検討

次に尺度の信頼性について検討するために、表層の疎外感尺度と深層の疎外感尺度の $\alpha$ 係数を求めた。その結果、表層の疎外感では.8284、深層の疎外感では.7465と算出された。深層の疎外感尺度は通常信頼性の下限値とされる $\alpha > .80$ を満たしていないため、信頼性を確保するためには新たに項目を追加する必要があった。しかし、項目数を増やして信頼性を高くすることよりも、7項目という少ない項目で疎外感を測定できることのほうが、実際に尺度を用いる際に重要であると判断し、あえて項目の追加はおこなわなかった。

以上の手続きにより、一次元性と信頼性を一応満たした、7項目からなる表層の疎外感と深層の疎外感の尺度が構成された。

### (4) 表層の疎外感尺度と深層の疎外感尺度の相関

ところで筆者は先に疎外感の4つの類型を提示した。これは表層の疎外感と深層の疎外感とが論理的に独立していることから導かれる議論である。では両者の経験的な関係はどうなっているのだろうか。このことを検討するために、両尺度の総得点間の相関を求めた。その結果、表層の疎外感と深層の疎外感の相関係数は $r=.0827$ となり、疎外感と疎外感回避志向性とは経験的にも独立であることが明らかになった。すなわち、表層の疎外感が強い者の中には、疎外感回避志向性が強い者も弱い者もいるということ、また表層の疎外感が弱い者の中にも、疎外感回避志向性が強い者も弱い者もいるということ、この結果は意味しているのである。そしてこのことは、疎外感の4類型が経験的にも存在しうることを示している。このような類型が現実構成できるということは、前述の政治的無関心の例のように、疎外に対する新しい接近を可能にするのである。そこで次節では、尺度構成の際に同時におこなった調査を用いて、さまざまな社会意識と疎外感とのかかわりについて述べていきたい。

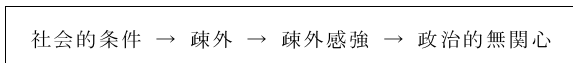
## 4 疎外感にかかわるさまざまな意識

### 4.1 分析の方法

本節では疎外感とそれにかかわる諸変数との経験的關係について、特に疎外感によって

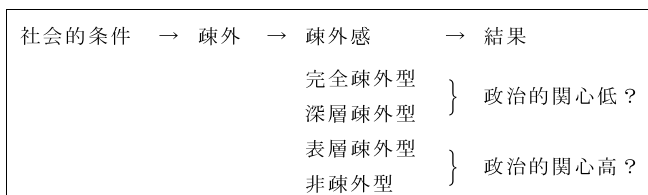
規定される社会意識との関連を中心に分析をおこなう。その前にまず、本稿の分析の方法を明確にしておこう。これまでの疎外研究の一般的な分析図式は、社会的条件→疎外→疎外感→結果というものである<sup>5)</sup>。政治的無関心を例にとると、従来の図式は図1のように表される。

図1 従来の政治的無関心の図式



本稿の図式も基本的にはこれと同じである。しかし疎外感を単なる強さとしてとらえるのではなく、深層の疎外感の視点を導入して類型としてとらえる点が異なっている。本稿の政治的無関心の図式は図2のように表される。

図2 本稿の政治的無関心の図式



以下では、従来の仮説に基づく結果と本稿の類型ごとの結果を比較しながら、疎外感が社会意識をどのように規定しているのかということを中心に考察を進める<sup>6)</sup>。

ところで前節の最後で筆者は、表層・深層両尺度間の相関はほとんどなく、疎外感の4類型が経験的にも存在するということを述べた。この4類型と社会意識との関連を分析するためには、人びとを類型のいずれかにあてはめるという作業が必要である。そこで本稿では、以下のような手続きにより類型構成をおこなった。まず、全回答者を表層の疎外感尺度得点の高い順に並べ、その上位50%を表層の疎外感が強い人、下位50%を表層の疎外感が弱い人とする。同様に深層の疎外感についても、それぞれ上位・下位の50%ずつを深層の疎外感が強い人・弱い人とする。そして、表層の疎外感も深層の疎外感も強い人を完全疎外型、表層の疎外感強く深層の疎外感弱い人を表層疎外型、表層の疎外感弱く深層の疎外感強い人を深層疎外型、表層の疎外感も深層の疎外感も弱い人を非疎外型として分類した。この手続きにより、有効回答者247名のうち、完全疎外型63名、表層疎外型57名、深層疎外型61名、非疎外型66名が、今回の分析の対象となった。これにならって、従来の仮説と比較する際に疎外感の強い人と弱い人を分ける場合も、表層の疎外感尺度得点の上位・下位50%ずつをとることにした。

## 4.2 疎外感と政治的無関心

政治的な関心を数量化することは難しい。よく引き合いに出されるのが、選挙における20歳代の棄権率と若者の政治的無関心との関係である [依田, 1988:6; 間場, 1980:170-176など]。これは投票という行動の側面から、政治への関心を測定しているといえる。

また、政治的な議論に参加しようとする意欲が政治的関心の指標とされることもある [Rosenberg, 1962:203]。この場合には政治的な関心は、議論に参加するという行動というより、議論に参加したいという欲求、あるいは議論に参加して政治的な知識を得ようとする態度としてとらえられている。また、直接ある社会的な問題への関心の程度としてとらえられることもある [Rosenberg, 1962:202]。これらを目ただけでも、政治的無関心が疎外感と同様に一次元的にはとらえられないことが理解できる。小林は政治的無関心を「政治にたいする知識獲得意欲や政治行動への意欲などが欠如した意識の状態」と定義し、この2変数によって政治的無関心の類型を構成した [小林, 1990:132-134]。このように政治への関心を知識・行動両側面からとらえることは、政治的無関心の研究にとっても疎外感の研究にとっても有効であろう<sup>7)</sup>。このことによって、政治的無関心をより広くとらえることができるだけでなく、無関心の両側面が、疎外感の表層・深層のどちらの水準に規定されているのかを明確にすることができるからである。それはすなわち、無関心と疎外感のそれぞれの類型にとって、何が欠如しているのかということをも明確化することを意味する。以下の分析では、政治への関心を示す変数として政治知識、政治行動、社会問題への関心の3つをとりあげることにし、これらの疎外感との関連について考察する。この3変数は論理的には独立であり、それぞれが疎外感によって規定されていると考えられるが、経験的には相互に影響しあっていると思われる<sup>8)</sup>。

#### (1) 政治知識と政治行動

表10に示したのは、疎外感の4類型別にみた政治知識と政治行動の平均得点である<sup>9)</sup>。まず表の左の部分のみをみてみよう。この結果は、疎外感が強いほど政治や社会にかんする情報と接触しなくなり、また政治行動の経験も少なくなることを示しており、従来の仮説を支持する結果であるといえる。一方、表の右の部分の類型ごとの比較をみると、政治知識、政治行動とも得点の高い順に非疎外型、表層疎外型、深層疎外型、完全疎外型となっている。これは従来の仮説とは異なる結果を示している。すなわちこの結果は、これまでは疎外感の強い人として分類されていた表層疎外型の方が、疎外感の弱い人として分類されていた深層疎外型よりも、政治情報との接触が多く政治行動も頻繁であることを示しているものであり、それは政治への関心の高さは表層の疎外感の強さだけでは説明できないことを意味しているのである。

表10 政治知識と政治行動

	従来の仮説			疎外感の類型				
	強	弱	全体	完全	表層	深層	非	全体
政治知識	7.27	7.71	7.51	7.00	7.58	5.56	7.83	7.50
政治行動	1.38	1.50	1.44	1.11	1.67	1.30	1.30	1.44

註) 従来の仮説とは、表層の疎外感m強弱のみを考慮した分類を意味する。政治知識は新聞の政治外交・経済・社会・社説の各記事について「必ず読む(3点)」「ときどき読む(2点)」「ほとんど読まない(1点)」で自己評価した得点の合計であり、その範囲は4点から12点である。また政治行動は署名運動や住民運動などの10項目のうち経験したことのあるものを1点とした場合の合計得点を意味し、0点から10点の範囲で示される。なお、20歳未満の回答者が多かったため「投票する」の項目は除いた。数値は各群内での平均を示している。

## (2) 政治的無関心と疎外感回避志向性

では、なぜこのような従来の仮説の「逆転」が生じたのだろうか。この問題を考えるためには、もうひとつの比較をしなければならない。すなわち表10の右の部分のうち、完全疎外型と表層疎外型、深層疎外型と非疎外型で、得点を比較するのである。知識・行動ともに完全疎外型<表層疎外型、深層疎外型<非疎外型となっていることがわかる。このことは、政治的無関心が表層の疎外感というよりも、むしろ深層の疎外感の問題であるということを示唆していると思われる。そこで政治知識と政治行動について、表層の疎外感と深層の疎外感の二元配置法による分散分析をおこなった（表11－表14）。

これらの結果は、深層の疎外感が表層の疎外感よりも政治的無関心を規定していること、そして政治行動の方がその傾向が強いということを示している。そこで次に問題になるのは、なぜ深層の疎外感が強いと政治的な関心が低くなるのか、ということである。

表11 表層・深層の疎外感別にみた政治知識得点

		深層の疎外感強	深層の疎外感弱	全 体
表層の疎外感強	平均	7.00	7.58	7.27
	実数	62	55	117
表層の疎外感弱	平均	7.56	7.83	7.70
	実数	61	66	127
全体	平均	7.28	7.72	7.50
	実数	123	121	244

表12 政治知識にかんする分散分析表

Source of Variation	Sum of Squares	DF	Mean Square	F	Sig. of F
Main Effects	21.978	2	10.989	3.500	.032
表層の疎外感	10.030	1	10.030	3.194	.075
深層の疎外感	10.860	1	10.860	3.458	.064
2-Way Interactions	1.421	1	1.421	.452	.502
表層の疎外感× 深層の疎外感	1.421	1	1.421	.452	.502
Explained	23.398	3	7.799	2.484	.061
Residual	753.598	240	3.140		
Total	776.996	243	3.198		

表13 表層・深層の疎外感別にみた政治行動得点

		深層の疎外感強	深層の疎外感弱	全 体
表層の疎外感強	平均	1.11	1.67	1.38
	実数	63	57	120
表層の疎外感弱	平均	1.30	1.68	1.50
	実数	61	66	127
全体	平均	1.20	1.67	1.44
	実数	124	123	247

表14 政治行動にかんする分散分析表

Source of Variation	Sum of Squares	DF	Mean Square	F	Sig. of F
Main Effects	14.443	2	7.222	4.281	.015
表層の疎外感	.617	1	.617	.366	.546
深層の疎外感	13.539	1	13.539	8.026	.005
2-Way Interactions	.439	1	.439	.260	.611
表層の疎外感× 深層の疎外感	.439	1	.439	.260	.611
Explained	14.882	3	4.961	2.941	.034
Residual	409.896	243	1.687		
Total	424.777	246	1.727		

深層の疎外感とは疎外感回避志向性のことであり、疎外感を回避しようとする態度といいかえることができる。そしてこの態度が政治的な関心を低下させていることになる。では、疎外感を回避するということは何を意味するのだろうか。疎外感回避志向性の特徴は「困難な課題の回避」「予測の拒否」「外的要因への帰属」「孤独の恐怖」「過同調」「批判的思考の欠如」であった。これらはすべて反省性を欠いた態度であるといわざるをえない。この非反省的な態度によって、政治や社会への関心が失われているのである。この反省をとまわずに疎外感を回避しようとする態度は、個人の意識内においては合理的な解決法であるかもしれない。しかし、社会的な視野で考えると決して望ましい態度とはいえない。疎外感回避のために社会に目を向けなくなっても、それで事態が改善されるわけではなく、疎外の克服にはつながらないのである。非反省的な態度にかんしては、アドルノらの権威主義的パーソナリティ研究、ロキーチの教条主義の研究、アイゼンクの軟心・硬心の研究などがあるが [Adorno et al., 1950 ; Rokeach, 1960 ; Eysenck, 1954 (小林, 1989b:392-396より引用)]、これらの態度も疎外感回避志向性とかかわっていると思われる。したがって、政治的な関心だけではなく、例えばマイノリティに対する偏見の問題や、若者の保守化の問題などについても、疎外感回避志向性から接近することは可能かもしれない。

### (3) 疎外感の類型と政治的無関心の類型との関連

先にも述べたように、小林は政治知識獲得意欲と政治行動への意欲という2変数から、政治的無関心を「無政治型」「興奮型」「情報屋型」「参加市民型」の4つの類型に分類した [小林, 1990:132-134]。ここではこの2変数を、政治知識・政治行動の得点で置きかえ、それぞれ得点の上位・下位50%で分けて類型を構成した。表15は、この政治的無関心の類型と疎外感の類型とのクロス集計の結果を、実測値/期待値によって示したものである。数値が1より大きいときは実測値が期待値を上回っており、1より小さいときはその逆であることを意味する。また、政治的無関心には深層の疎外感がかかわっていることが明らかになったため、深層の疎外感についても比較している。まず、表の左の部分の表層の疎外感の比較では、疎外感の強い人は狭義の無関心の類型である無政治型に多く、表層の疎外感が弱い人は無政治型には少ないということがいえる。次に、表の中央の部分の深層の疎外感の比較でもほぼ同様の結果を示しているが、その傾向がより顕著であるといえるだろう。これは政治知識・政治行動が深層の疎外感に規定されていることを考慮すれば、当然の結果ともいえる。しかし、広義の政治的無関心としての興奮型や情報屋型についてはあまり



説明していない。深層の疎外感は政治的無関心を規定する重要な要因ではあるが、それだけですべて説明できるものでもないのである。

表15 政治的無関心の類型との関連

	表層の疎外感		深層の疎外感		疎外感の類型			
	強	弱	強	弱	完全	表層	深層	非
無政治型	1.158	.856	1.204	.794	1.343	.938	1.033	.696
興奮型	.988	1.011	.884	1.117	.879	1.111	.889	1.134
情報屋型	.855	1.133	.894	1.107	.880	.818	.894	1.353
参加市民型	.922	1.071	.890	1.111	.745	1.138	1.081	1.050

註) 数値は実測値／期待値を示している。

では、疎外感の類型と政治的無関心の類型を対比させてみるとどうだろうか。それぞれの無関心の類型に最も高い値を示しているのは、無政治型－完全疎外型、興奮型－非疎外型、情報屋型－非疎外型、参加市民型－表層疎外型である。この結果は大変興味深いものである。我々にとって最も望ましい政治参加の姿が参加市民型であることはいうまでもないが、この参加市民型に多いのが、非疎外型ではなく表層疎外型であるということは、表層の疎外感の存在が、政治的な関心をもつための条件であるかもしれないからである<sup>10)</sup>。政治知識や政治行動がそれぞれ、反省的な態度としての深層の疎外感に規定されることは、表12および表14が示している。しかしそれは、知識・行動の両方をもつこととは別である。表層の疎外感も深層の疎外感も弱い非疎外型が、それぞれ知識獲得・政治行動の一方には高い関心を示しても、もう一方への関心は低いということは、表層・深層の疎外感が総合的に政治的な関心を形成することを意味していると思われる。したがって、政治的無関心の類型を疎外感の類型と対比させることは有効であるといえるだろう。なぜならば、政治的無関心を知識・行動からとらえることによって、それぞれの類型が参加市民型となるためには何が欠如しているのかということが明らかにされ、それは表層・深層のどちらの水準の疎外感によりかわる問題であるのかを分析するための手がかりを得ることができるのである。今回の分析は、政治知識獲得意欲・政治行動への意欲を政治知識・政治行動にそのまま置きかえてもよいのかという問題も含めて、決して十分なものとはいえないが、政治的無関心の研究に疎外感の類型を用いることの意義については確かめられたと思われる。この両者の関連については、今後さらに考察されなければならない。

#### (4) 社会問題への関心

これまでの議論では、政治的な関心を政治一般に対する関心としてとらえてきたが、具体的な社会問題への関心についても同様のことがいえるだろうか。表16に示したのは、疎外感の類型ごとの社会問題への関心の高さである。まず全般的な関心として全体の得点平均をみると、表層の疎外感の比較では疎外感が弱い方が問題への関心が高く、予測どおりの結果を示している。一方、類型の比較では関心の高い順に非疎外型、深層疎外型、完全疎外型、表層疎外型となっている。これは意外としかいいようがない。というのは、先の結果では参加市民型に多いのは表層疎外型であり、筆者の予測では表層疎外型が社会問題に対しても高い関心を示すと思われたからである。

表16 社会問題への関心

	従来の仮説			疎外感の類型				
	強	弱	全体	完全	表層	深層	非	全体
エネルギー問題	2.63	2.70	2.66	2.65	2.61	2.59	2.79	2.66
環境問題	3.08	3.24	3.17	3.10	3.07	3.21	3.26	3.16
農業問題	2.63	2.62	2.63	2.56	2.70	2.61	2.64	2.62
過疎問題	2.19	2.23	2.21	2.24	2.14	2.17	2.27	2.21
高齢化問題	3.01	2.96	2.98	2.90	3.12	2.95	2.95	2.98
土地問題	2.26	2.38	2.32	2.34	2.16	2.36	2.39	2.32
原発問題	2.57	2.63	2.60	2.56	2.58	2.56	2.68	2.60
全体	18.35	18.75	18.56	18.37	18.34	18.42	18.98	18.54

註) 従来の仮説とは表層の疎外感の分類を意味する。各問題への関心は1点から4点で自己評価したものであり、得点が高いほど関心が高いことを意味する。数値は各群内での平均を示している。

そこでこの問題を検討していくために、個々の社会問題についてみていくことにしよう。社会問題への関心の高さが類型によって異なる理由として、人びとの属性の違いによるだけではなく、社会問題自体のもつ性格が影響していることは、もちろん十分にありうることである。このような観点からそれぞれの社会問題で最も得点の高い類型に注目すると、多くの問題は非疎外型の関心が高いといえるが、農業問題と高齢化問題については表層疎外型の関心が最も高くなっている。したがって、表層疎外型は社会問題全体について関心が低いわけではなく、ある問題については高い関心を示しているのである。この農業問題や高齢化問題は、相対的に社会的弱者にかかわる問題であるといえるだろう。そしてそのような問題に対しては、非反省的な態度傾向の強い人はあまり関心を示さないということが考えられる。そのために、深層の疎外感の弱い表層疎外型の得点がこれらの社会問題で高くなっているものと思われる。しかしこの説明では、なぜ表層疎外型が他の問題にはあまり関心をもっていないのかという問題を説明することはできない。社会問題への関心と疎外感の類型との関連については、今後さらに検討する必要があるだろう。

#### 4.3 その他の社会意識との関係

政治以外の社会意識についても簡単にふれておこう(表17)。階層帰属意識、生活満足感、および公平感、表層の疎外感が強いほど低くなるとされてきたが、今回の調査でもこのことを支持する結果が出ている。類型ごとに比較しても深層疎外型・非疎外型の得点が高くなっており、これらの意識は表層の疎外感に規定されていると思われる。ただし公平感、深層疎外感にも関連していると考えた方がよいかもしい。また信仰や宗教にかんする意識については、表層の疎外感が強いほど信仰・信心をもつようになるといえるが、信仰・信心をもつことと宗教への関心が高いことは別であることが明らかになった。宗教への関心が最も高いのは非疎外型であり、次いで完全疎外型となっている。宗教意識は、表層の疎外感に規定されることももちろん考えられるが、疎外感とは異なる意識から生じることもあるのではないかとと思われる。

表17 社会意識と疎外感との関連

	従来の仮説			疎外感の類型				
	強	弱	全体	完全	表層	深層	非	全体
階層帰属意識	2.36	2.64	2.51	2.35	2.36	2.61	2.67	2.50
生活満足感	2.59	3.02	2.82	2.56	2.62	3.05	3.00	2.81
公平感	2.01	2.11	2.06	2.05	1.96	2.20	2.03	2.06
信仰・信心	1.85	1.77	1.81	1.89	1.82	1.77	1.76	1.81
宗教への関心	1.97	2.09	2.03	2.00	1.95	1.93	2.23	2.03

註) 従来の仮説とは表層の疎外感の分類を意味する。信仰・信心は1点、2点、その他の社会意識は1点から4点で自己評価したものであり、得点が高いほどその意識が高いことを意味する。数値は各群内での平均を示している。

#### 4.4 まとめ

以上、政治的無関心を中心に疎外感の類型と社会意識との経験的関連について述べてきた。本節で明らかにされたことは次の8つである。(1) 政治的無関心を既存研究のように表層の疎外感からとらえるだけでは不十分であり、深層の疎外感という視点が必要である。そして(2) 政治知識・政治行動は、深層の疎外感によってより強く規定されている。この深層の疎外感是非反省的態度であると考えられる。また(3) 小林の政治的無関心の類型と本稿の疎外感の類型との間には、ある程度の対応関係がみられる。(4) このことは政治的無関心が表層・深層両疎外感の総合的な結果であり、どちらか一方のみで決定されるわけではないことを示している。(5) 社会問題全体への関心については、ほとんど疎外感の類型によって説明することができない。しかし(6) 問題の種類によって関心の示し方が異なることを、疎外感で説明することはある程度は可能である。(7) 政治知識、政治行動、および社会問題への関心の高さの間には、経験的な相関関係がみられる。なお(8) 本稿でとりあげたその他の社会意識については、ほぼ従来の研究どおり表層の疎外感によって規定されているということができると思われる。

表層・深層の疎外感によって類型を構成し、それを用いて分析をおこなうことの有効性は十分みとめられたといえる。しかし残された問題も多い。また、疎外感を規定している要因については、全くふれることができなかった。これらの問題については今後の課題としたい。

#### 5 おわりに

疎外は社会的な問題である。そして疎外感もまたそうである。疎外感がある社会の姿の反映としてとらえたとき、それは社会的な問題となるからである。本稿の深層の疎外感の概念は、あるべき社会を探求することを自ら拒否し、陽気に生きていこうとする人びとの姿を浮き彫りにした。彼らはまさにロボットと化してしまった自我にも、また、そうさせている社会のありようにも気づくことはない。それはある意味では幸せなことかもしれない。しかし、そのような生き方はあるべき人間の生き方ではないと筆者は思う。現代に生きる我々に求められているものは、自らの内発的な意志にしたがって行為することができるような自我を確立することではないだろうか。そして疎外の克服は、このような自我をもつことなしにはありえないのではないだろうか。疎外の現実を直視することはたや

すいことではない。しかし真の自由や幸福を得るためには、決して避けて通ることのできない道なのである。

[付記]

1994年1月、筆者は奈良女子大学文学部社会学科の学生として、「疎外感について」というタイトルの卒業論文を提出した。疎外論というテーマは、当事としては時代遅れといえるものだったかもしれない。マルクスを一つの出発点とする疎外論は、1950年代から60年代にかけて隆盛した大衆社会論においては、政治的無関心や無力感といった文脈で「疎外感」という意識次元の問題としてしばしば論じられた。近代化の進展にともなう、個人は伝統的な共同体の束縛から解放され自由を獲得した。しかし一方でそれは、個人が官僚制組織に埋没し、社会の歯車と化していく過程であり、また、連帯を失った個人が集団から切り離されて孤立していく過程でもあった。そのような状況のもとで、人びとは無力感や孤独感を増大させていくことになる。大衆社会論についてこの程度の理解しかできていなかったとはいえ、「自由を獲得することが、必ずしも幸福に結びつくわけではない」ということを真正面から論じようとしたこれらの議論に、社会学の勉強を始めたばかりであった筆者が魅力を感じていたことは間違いない。

もちろん、筆者が学生時代を過ごした90年代にはこうした議論も一段落しており<sup>11)</sup>、社会学の流行はめまぐるしく移り変わっていった。人びとが私的な生活領域のみに関心を向ける傾向がメディア等で批判的に取り上げられることはあっても、そこには「疎外」という言葉が連想させる暗さはなく、むしろ、社会全体に明るいうも드가漂っているように感じられた。疎外の問題は「過去のもの」として忘れ去られようとしていた。

しかしこの明るさは、社会に背を向け、問題を直視することをせず、責任を放棄することによって得られた「表向きの」明るさにすぎないのではないか。疎外の状況は存在するにもかかわらず、疎外感を回避しているだけにすぎないのではないか。だとするならば、疎外感を回避しようとする志向性を持つこともまた「疎外」といえるのではないか。筆者が疎外論を卒論のテーマに選んだのは、疎外の問題は決して「過去のもの」ではないということを論じたかったからであった。

その意味では、卒論の提出から18年が経過した現在においても、疎外は決して過去の問題として片付けることはできない。「表向きの」明るさをよしとする傾向は、現代においても存在していると考えられるからである。ただし、18年前の筆者は、疎外を論じることの重要性を示すことはできたが、その克服の可能性については全く考えることができていなかった。当時は、自立した市民が自発的に意思決定に参加する社会を、望ましい社会のありようとして漠然と想定していただけである。たしかに、このような市民参加型の社会は、疎外の真の克服のためにめざされるべき一つの理念型といえるかもしれない。

しかし、それから長い年数が経った現在、この考えはいささか浅薄だったのではないかという気がしてならない。というのは、このような社会においては、人びとは常に厳しい要求をつきつけられることになるからである。疎外状況に直面しても疎外感を回避することを許さず、社会の一員としての責任を果たしていくことで疎外を克服することを求める社会が、ここでは想定されている。その前提となるのは、社会の問題を直視し、連帯した市民が「われわれの問題」として考え、ともによりよい社会を築いていくことを理想とするような社会観・人間観である。すなわち、「社会の問題」を一人ひとりが「自分（たち）の問題」として引き受ける強い意志、義務感、禁欲性が社会の成員に要求さ

れるのである。これは非常に厳しい生き方である。にもかかわらず、このような社会においても、参加のための資源が相対的に少ない者が弱者となり疎外されるという状況は回避できない。そして疎外された弱者ほど、社会が要求する人間像であり続けることは困難となっていく。結局のところ、「成熟した」市民社会の実現をめざすことは、疎外の克服につながらないのではないかという気がするのである。

あれから日本では、慢性的な経済不況による停滞感が続き、また二度の大震災を経験するなど、これまでよしとされてきた価値観や生き方を揺るがすような出来事が次々と起こっている。そのような中、震災やテロ事件が起こるたびごとに人びとが見せた見知らぬ他者への思いやり、共感、信頼といった感情は、決して義務感から生じたものなどではなく、ごく自然な感情の表出だったのではないかと思われる。抑制的な人間像を前提とせず、感情や欲求を当たり前に持つ人びとで成り立つ社会において、いかにして連帯や信頼の契機は形成されるのかという問題について検討していくことが、筆者にとって今後の課題となるだろう。この問題を考える出発点となりうるものとして、ここに卒業論文を掲載することにした次第である。

18年前の論文は、現在の目で眺めると書き直したい箇所もあるが、執筆時の状況や筆者の未熟さも含めて当事の雰囲気を残すために、字句をいくつか修正したほかはそのまま掲載することにした。「原稿用紙50枚以内」という規程のために、一文字ごとに文字を削除していき、何とか枚数以内におさめることができたのも、今となっては良い思い出である。

指導教官だった小林久高先生には、分析手法から文章の書き方にいたるまで、ときに厳しく、しかし非常に丁寧に指導いただき、大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。

## 註

- 1) 疎外の問題は、マルクス主義や実存主義などさまざまな立場から論じられてきた。しかしその概念にかんしては社会学や社会学に隣接した理論にかぎっても、必ずしも明確な定義が与えられているとはいえない。例えば、ウェーバーの官僚制や合理化の議論、デュルケムのアノミー論、またジンメルの一連の問題関心などは、いずれも疎外の問題をあつかっているといってもよいのである。そして近年では疎外の意味が拡張される傾向にあり、疎外の内容はますます多様化している。イスラエルは疎外の理論的準拠枠として、疎外を客観的な現象としてとらえる「社会志向」と、主観的な現象としてとらえようとする「個人志向」があると述べている [Israel, 1971:10-17]。「個人志向」に対する批判についてはすでに本文で述べた。その一方で、ある客観的条件のもとでは疎外されているとは思ってもいない人びともすべて疎外されていることになってしまうのではないかという「社会志向」に対する心理学からの批判もある [水口, 1985:179]。しかし疎外論にとって重要なことは、相手の立場の批判をすることではなく、共通の枠組みで議論できるような定義を与え、疎外を主観的事実と客観的事実との関連においてとらえていくことであろう。なお、疎外論の系譜の詳細については、小林 [1980]、斎藤他 [1982]、池田 [1991] など参照のこと。
- 2) この調査は1993年11月、12月に、4つの大学でいずれも社会学の講義時間中に実施された（同志社大学33名、帝塚山大学28名、奈良女子大学76名、奈良大学114名）。調査の趣旨を説明した後調査票を配布し、その場で回答してもらった。また調査票はその

講義時間中にすべて回収された。

- 3) 疎外感尺度として選択された各7項目について、それぞれ主成分分析をおこない、項目間の相関係数を求めた(結果は本稿末に掲載)。やはり表層の価値離脱感は、明らかに他の2つの要素から区別される要素であるというべきであろう。したがって疎外をより正確にとらえるためには、多次元的な尺度が必要であると思われる。しかし多次元的な尺度を構成することによって、今度は異なる次元の得点を総合するというやっかいな問題が生じる。今回の尺度構成は、このやっかいな問題を回避し、かつ疎外の多様な意味を尺度に含ませるぎりぎりの選択であった。なお、多次元的な尺度の得点を総合することの意味を論じたものについては、安田[1970:147]、小林[1989a:78]を参照のこと。
- 4) ここでいうG-P分析とは、以下のような手続きでおこなわれたものである。まず全回答者を総得点の高い者から順に並べ、その上位25%を上位群、下位25%を下位群として抽出する。次にこの上位群・下位群それぞれについて各項目の得点の平均値を算出し、項目ごとに上位群と下位群の得点差の有意性をt検定によって検討する。有意差の得られなかった項目は、他項目との等質性が疑わしいものと判断される。このG-P分析は尺度の一次元性の検討のためにしばしば用いられ、これを満たすことによって一次元性が確保されたとすることが多い。詳しくは安藤 [1987:152-158] を参照のこと。
- 5) 疎外感と政治的無関心との関連についての既存研究は多い。そしてその大部分が、政治的な有効性感覚や政治的な疎外感・シニシズム・アノミーにかんする研究である。しかし疎外感を政治的なものに限定せず、より広い意味でとらえて政治的無関心との関連を論じたものもある。例えば、自尊感情と政治的な関心との関係についての研究や [Rosenberg, 1962]、自分の日常的な課題と挑戦により多くの有効感をもっている人間の方が、政治に参加する可能性が強いということを検証した諸研究、また社会的なパーソナリティと政治参加との関連についての研究などは、本稿の疎外感の立場に近いと思われる。もちろん、客観的事実としての疎外(政治的周辺性)が政治的無関心を生じさせるという近代化論のような立場もあるが [岡田, 1980:155-158]、この場合も何らかの疎外の感情が生じていると思われる。なお、疎外感と政治的無関心にかんする研究については、ミルブレイス [Milbrath, 1965=1976:67-125]、ロビンソン他 [Robinson & Shaver, 1969] など参照のこと。
- 6) 今回の調査には、疎外感を規定する要因についての質問も含まれていた。しかし学生を対象としているため、年齢・学年・性別・大学・学部・学科・居住形態(自宅・下宿・寮・その他)・居住地域(市部・郡部)・帰省先(市部・郡部)・所属団体数・相談相手を質問するとどまり、この中で類型による差がみられたのは年齢だけであった。どのような社会的要因によって疎外感が生じるのかという問題は、疎外研究にとって重要な問題であるが、この問題については本稿でふれることができなかった。
- 7) 鮑戸が行動レベル・関心レベル・知識レベルを基準に政治関与のパターンを類型化していることは、大変興味深い [鮑戸, 1971:141]。政治的無関心というまでもなく関心レベルであり、意識の次元の問題である。したがって、実際に行動することや知識をもっていることとは次元を異にしている。小林の定義は、この行動や知識の次元に向

- かわせる態度として関心をとらえ、それを意欲という言葉で表したものと考えられる。
- 8) 政治知識、政治行動、そして社会問題への関心という変数は論理的には独立している。しかし実際には相互に影響していると考えられる。そこで、これらの経験的な関連について述べておこう。政治知識と政治行動、政治知識と社会問題への関心、政治行動と社会問題への関心の相関係数を算出すると、それぞれ  $r=.4020$ 、 $.2421$ 、 $.2785$ であった（いずれも1%水準で有意）。
- 9) 政治知識の指標としてマス・メディアとの接触量を選んだのは次の理由による。政治にかんする情報を提供する主体としては家族や学校、職場、政党、マス・メディアなどが考えられるが、その情報量や我々に与える影響力の大きさを考えると、マス・メディアに優るものはないと思われる。そしてそのなかでも新聞は日常的に接触しているものであり、また「受け身的」といわれるTVよりも個人の積極的な態度が反映されやすいと考えたからである。
- 10) この問題にかんしては、疎外感が「単に疎外の過程だけでなく、新たなる疎外と疎外止揚の可能性を産出する過程においても起こりうる」という池田の指摘がある〔池田, 1991:59〕。
- 11) 筆者の記憶では、「私生活主義」「三無主義」「しらけ世代」等の言葉が、依然、メディアを賑わせていたような印象があるが、1990年代は「これからは、国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」「何か社会のために役に立ちたい」という意識が増加した時期でもある〔内閣府「国民生活に関する世論調査」より〕。その一方で「身近な人たちと、なごやかな毎日を送る」という生き方に価値をおく人は、70年代以降、増加を続けている〔NHK放送文化研究所「日本人の意識」調査より〕。

## 引用文献

- 間場寿一, 1980「投票行動と政治的諸態度」秋元律郎・森博・曾良中清司編『政治社会学入門』有斐閣。
- 鮑戸弘, 1987『社会調査入門』日本経済新聞社。
- 安藤清志, 1987「態度・性格尺度の構成」末永俊郎編『社会心理学研究入門』東京大学出版会。
- Dean, D. G., 1961, "Alienation: Its Meaning and Measurement", *American Sociological Review* 26-5:753-758.
- Festinger, L., 1957, *A Theory of Cognitive Dissonance*, Row, Peterson and Company. (=1965, 末永俊郎監訳『認知的不協和の理論——社会心理学序説——』誠信書房。)
- 池田勝徳, 1991『疎外論へのアプローチ』ミネルヴァ書房。
- Israel, J., 1971, *Alienation from Marx to Modern Sociology: A Macrosociological Analysis*, Allyn and Bacon.
- 加藤秀俊, 1989『文芸の社会学』PHP文庫。
- 小林久高, 1989a「態度テストの信頼性・妥当性・次元性について——次元性と信頼性の関係を中心に——」『関西学院大学社会学部紀要』58:69-80。
- , 1989b「権威主義・保守主義・革新主義——左翼権威主義再考——」『社会学評論』39-4:392-405。

- , 1990 「民主主義を実現するために——権力と参加——」中野秀一郎編『ソシオロジー事始め』有斐閣.
- 小林良彰, 1980 「アノミーと疎外」堀江湛・富田信男・上條末夫編『政治心理学』北樹出版.
- Merton, R. K., 1949, "Social Structure and Anomie", *Social Theory and Social Structure*, The Free Press. (=1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- Milbrath, L. W., 1965, *Political Participation : How and Why Do People Get Involved in Politics?*, Rand McNally. (=1976, 内山秀夫訳『政治参加の心理と行動』早稲田大学出版部.)
- Mills, C. W., 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press. (=1965, 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店.)
- 水口禮治, 1985『無気力からの脱出』福村出版.
- Nisbet, R., 1953, *The Quest for Community*, Oxford.
- 岡田直之, 1980 「現代の無関心と政治からの疎外」秋元律郎・森博・曾良中清司編『政治社会学入門』有斐閣.
- Pappenheim, F., 1959, *The Alienation of Modern Man*, Monthly Review Press. (=1960, 栗田賢三訳『近代人の疎外』岩波新書.)
- Robinson, J. P. & Shaver, P.R.(eds.), 1969, *Measures of Social Psychological Attitudes*, Institute for Social Research.
- Rosenberg, M., 1962, "Self-Esteem and Concern with Public Affairs", *Public Opinion Quarterly* 26:201-211.
- 斎藤正二編, 1982『疎外論』多賀出版.
- Seeman, M., 1959, "On the Meaning of Alienation", *American Sociological Review* 24-6:783-791.
- 安田三郎, 1970『社会調査の計画と解析』東京大学出版会.
- 依田博, 1988 「政治と人間」依田博他『政治』有斐閣.



### 【註3】表層・深層の疎外感尺度7項目の主成分分析結果および相関行列

表層の疎外感尺度7項目の主成分分析結果

項目の内容	主成分						
	1	2	3	4	5	6	7
どちらかという積極的に行動するほうだ (R)	.80679	-.01984	.16055	-.14932	-.51251	-.09088	.17234
思いっただらすぐ実行するほうだ (R)	.66213	-.31306	.29411	-.54425	.27732	.06267	.00576
やれば何かできるという自信がある (R)	.59023	-.29015	.53052	.51958	.12072	-.01351	.03575
社交的な性格である (R)	.87770	-.03644	-.15949	.05983	-.14419	.16271	-.38992
友だちはどちらかという多いほうだ (R)	.80271	.14876	-.39829	.12598	.13037	.27396	.25878
友だちとわいわい騒ぐことが多い (R)	.82717	.08233	-.33811	.04067	.19164	-.39472	-.02245
全体としてみれば、今の社会に満足している (R)	.27159	.88011	.37548	-.04829	.08096	.01315	-.04006
寄与率 (%)	51.6	14.1	11.9	8.7	6.2	3.9	3.6

表層の疎外感尺度7項目間の相関行列

項目の内容	1	2	3	4	5	6	7
1. どちらかという積極的に行動するほうだ (R)	1.0000	.5145**	.4465**	.6662**	.5063**	.5436**	.2251**
2. 思いっただらすぐ実行するほうだ (R)	.5145**	1.0000	.3719**	.4819**	.3555**	.4254**	.0606
3. やれば何かできるという自信がある (R)	.4465**	.3719**	1.0000	.4329**	.2901**	.3371**	.1019
4. 社交的な性格である (R)	.6662**	.4819**	.4329**	1.0000	.6951**	.6966**	.1470*
5. 友だちはどちらかという多いほうだ (R)	.5063**	.3555**	.2901**	.6951**	1.0000	.7215**	.1921**
6. 友だちとわいわい騒ぐことが多い (R)	.5436**	.4254**	.3371**	.6966**	.7215**	1.0000	.1819**
7. 全体としてみれば、今の社会に満足している (R)	.2251**	.0606	.1019	.1470*	.1921**	.1819**	1.0000

\* P < .05 \*\* P < .01

深層の疎外感尺度7項目の主成分分析結果

項目の内容	主成分						
	1	2	3	4	5	6	7
社会の問題についてはそれぞれの専門家にまかせておくのが一番よい	.64235	-.35846	-.25117	.35940	.29864	.31174	-.28127
人生はなりゆきにまかせたほうが案外うまくいく	.52903	-.38996	.66491	-.02736	-.26168	.20563	.12016
われわれ一般人が努力したところでたかが知れている	.60816	.32079	.03428	.63613	-.17765	-.24781	.16863
自分だけ周囲の人たちから浮いていないか気になるほうだ	.52374	.58636	.38607	-.17289	.42060	.08076	-.13967
あまり人目に立つようなことはしないほうがよい	.66889	.23527	-.40240	-.25187	-.18175	.35725	.33349
他人と同じように生きるのが望ましい	.71535	.02873	-.12362	-.26845	-.40098	-.23480	-.42922
今の世の中はいたずらに批判するよりも現状を維持していくことのほうがずっと大切だ	.67087	-.36160	-.08296	-.22734	.36148	-.40529	.25630
寄与率 (%)	39.2	13.1	12.0	10.7	9.9	7.9	7.2

深層の疎外感尺度7項目間の相関行列

項目の内容	1	2	3	4	5	6	7
1. 社会の問題についてはそれぞれの専門家にまかせておくのが一番よい	1.0000	.2493**	.3191**	.1577*	.3211**	.3114**	.4114**
2. 人生はなりゆきにまかせたほうが案外うまくいく	.2493**	1.0000	.2160**	.1996**	.1602*	.2974**	.2964**
3. われわれ一般人が努力したところでたかが知れている	.3191**	.2160**	1.0000	.2916**	.3087**	.3259**	.2246**
4. 自分だけ周囲の人たちから浮いていないか気になるほうだ	.1577*	.1996**	.2916**	1.0000	.2823**	.2620**	.2301**
5. あまり人目に立つようなことはしないほうがよい	.3211**	.1602*	.3087**	.2823**	1.0000	.4479**	.3301**
6. 他人と同じように生きるのが望ましい	.3114**	.2974**	.3259**	.2620**	.4479**	1.0000	.3809**
7. 今の世の中はいたずらに批判するよりも現状を維持していくことのほうがずっと大切だ	.4114**	.2964**	.2246**	.2301**	.3301**	.3809**	1.0000

\* P < .05 \*\* P < .01